



水軍の船



鶴姫の甲冑



台風により荒れる高知の海

2011年7月、徳島にも放射能で汚染された牛肉が流通。人間関係の悩みや仕事でのストレスなどはきわめて個人的なもの。同時にいくつも抱えていたり、どれかが一つ解消することでとても気が軽くなったりのくりかえし。そうそう簡単に払拭できない、何十年も晴れることの無い、もしかすると永遠になくならないかもしれないような重いストレスを、全国民が同時にかかえるなどということは初めてのこと。日本だけではなく、もしかすると世界中の人々が背負ってしまったといえるのかもしれない。この核の恐怖というストレスを。戦争や宗教間の争いも、そういう容易に晴れない地球的な悩みの一つかもしれないが、物理的に地球が蝕まれ、人が傷ついていく、どうにもコントロールできないままに、という、今回の震災、そして津波が引き起こした原発事故と、その後の悪夢のような事態とは違う。我々が理解していなかっただけで、放射能汚染とその可能性は深く静かに拡大していたわけだが。この、見境の無い、暴力的なストレスが「ひと」の生命、遺伝子、根幹的な部分に刻んでしまうかもしれない「傷」。現時点では将来どのような形で現象として現れるのか想像もつかない。

政治に、産業に、情報に、消費に、過剰にコントロールされてきた我々の社会、そして生活。モノをはっきりと見えなくするゼリーみたいな「甘い覆い」がはがされて、「えっと、われわれはなにしてたんだっけ?」というような気持ちになることが震災以降よくある。

この機に掘り起こして記憶にとどめ、「教え」として受け継いでいこうと四国の「災害由来の建築」を探している。四県それぞれに出てきたものを見ていると、ある種共通した「美しさ」がある。石積みだったり瓦屋根だったり左官仕事だったり。機能的要求をかたちにするときに自然に美的な意識が織り込まれていく。自然派生の材料で、自然の圧倒的な力に立ち向かおうとする姿、そしてそれが面的に展開するとき、集落としてえいめい美しさ



阿波踊り



お遍路



巡礼の様子

と力強さがみなぎる。…古来、戦闘のための装束、武器、武具にも、特有の美しさがあった。「頼むぞ!」という気持ち、「祈り」の気持ち、「おごらない」人の姿…。自分達も、「美しい自然」の一部に過ぎないんだという戒め、しかし「美しい自然」の一部なんだこのわれわれも、という魂の叫びか。

「ウォーターフロント」という言葉がある。水際のまちづくりや建築。「水」をたたえた美しい自然の景色に映える、わくわくするような、われわれが「生き物」としてうれしい環境をつくること。80年代以降多くの水際空間がこの手法で活性化しました。また、地下利用を「ジオフロント」ともいう。この、地球的にみんなが傷つきゆく時代に必要なのは、「マインドフロント」という視点ではないだろうか。気持ちを込め、戒めを込めて、人間は地球にとっておいに悪者だが、自分達だって自然の一部なんだという意識を、感性をいつも喚起させるような建築。月並みだが、本当に大事なのはやはり「癒される」建築。人間が尊厳を保ちうる建築。必然的な機能を美に昇華した建築。そしてその連なりが生む集落、景色、地方のグランドデザイン。

さまざまなメディアからの情報を、効率よくいい環境で享受できることがいい建築の条件なのではやはりなかったことに今回みんなが気付いたはず。本来そこここにあった闇を失い、自省を促せなくなった、明るすぎる街や建築。自然の暗闇と我々の存在の連関がリニアでなくなり、途絶えてしまった。ノイズで真の姿を見えなくしてしまったような状況に浸っているうちに、気がつくとういうことになっているのに。地球とつながり、天ともつながり、人と人もつながっていく。いわば「マインドフロントの建築」～そしてまちづくり。災害由来の街並みから、建築から見えてくる『自然の猛威を正面から受け止めずに共生し、むしろ美しくかわし、受け流す』とでもいうのか、そういう、地域に受け継がれてきた教えを機軸とした建築活動を展開していきたいと思う。2050年、四国の地にどう結実しているのか。